日本GAP
ニュースレター
1962
7月－8月号

日本GAPニューズレター 1962年 7月－8月号

真実は認められつつある	G・アダムスキ	1
幽霊現象と霊界通信	C・A・ハニー	3
質疑応答	C・A・ハニー	6
ブラザーズと哲学	C・A・ハニー	13
高空核実験による影響	C・A・ハニー	15
地球、八時間震動す	C・A・ハニー	16
イタリアの円盤同乗事件	L・ツィンシュターク	16
P氏から編者宛の私信	G・アダムスキ	19
編集後記		20

真実は認められつつある

ジョージ・アダムスキ

私宛に寄せられる多くの質問に答えるために再びこのニューズレター（註。ハニー氏のニューズレター）へ寄稿することにします。私たちの運動は次第に大きくなってゆきますので各質問にたいして私が個人的に答えることは不可能です。円盤・ブラザーズに関して目下膨大な書物になるほどの資料がありますが、これはこの世界によりよき理解をもたらして、よりよき住家になし得るための知識となるものです。

私に与えられてきた一つの局面はその範囲がきわめて広いので、世界の人口の八〇パーセントを包括することになるでしょう。この地球の文明が続くということになればそれはきわめて必要なことなのですが、目下私はそれについて殆ど何もなすことができません。かかる計画を始めるのに必要な人員のすべてを雇う方法を私は持たないからです。多数の人が援助しようと申し出ておられることは事実ですが、この仕事に必要な線に沿って訓練を受けている人はごく少数です。この仕事を始めるとなれば先ずタイプライターを打つ仕事が沢山あります。これは、この仕事の遂行に援助できる人々へ文書を発送するためです。もし、いわゆる黄金時代が来るとすれば、この仕事はそれの先駆をなすものとなるでしょう。

この計画につけられた名称は〝生存のための精神改革運動〟です。これには城を建てたり、世界がどのようになるだろうかといった夢を描いたりする必要はありません。ただし残留者がいなければです。新しい世界を楽しもうとするのなら、夢を描く必要があります。もし新しい社会が、創造者が提供しなければならないあらゆる善き物と共に出現するこになれば、先ず絶滅の危険のすべてを排除する必要があります。「創造者が提供しなければならない」と私が言うのはまさに字句のとおりを意味します。というのは創造者は現在の文明へこの理解をもたらすために〝ブラザーズ〟を用いているからです。ブラザーズを非難したり疑ったりする人は創造者自体を疑うのと同じようなものです。ブラザーズは神または創造者ではなく、彼らはこの地球の文明をその愚かさから救い出すために創造者に奉仕しているのです。もし誰もがブラザーズがすでにやってきたのと同じほどの事をなしとげるつもりならば、我々は放射能による絶滅を心配する必要はありません。多くの物事が可能なのですが、しかし誰かがそれをやろうとしているのでしょう。

ワシントン市への私の旅行は大成功でした。よき結果に終わるように割当てられた使命を私は果たすことができました。その使命というのは大気圏外を平和と教育の目的に使用することに関するものでした。その旅行にかなり金がかかったとしても私はその結果に心から満足しています。

私はニューヨークのWOR放送局から受けた歓迎を甚だ嬉しく思っています。私は深夜の十二時から朝の五時までラジオの討論会に出席しました。席上で私に示された好意にたいし、ロング・ジョン・ネベル及び出席者全員に感謝する次第です。また私と一緒にその番組へ出席されたジェイムズ・モスリー氏の御親切に特に謝意を表します。我々は相互の誤解を解決し、また円盤・ブラザーズ問題について両方の意見を聴取者に聴かせる機会を与えました。WORのこの放送討論会ほどの立派な放送をかつて私は体験したことはありません。どちらか一方に賛成して判決を下す裁判官と陪審員は大衆です。全部の人の言い分をよく聞いた上で各自の意見の相違を充分に検討するのに、モスリー氏の如く大衆に対

抗できるほどの力強い人は多くいません。私はモスリー氏に敬意を表するものです。

奇妙なことですが、私がその朝デトロイト行きの飛行機に乗り込んだとき、その番組を徹夜して聴いたというオハイオ州の或る大学教授と知り合いになりました。彼は私と同様にその放送の当時は眠かったそうですが、内容があまりに面白いのでついに最後まで聴いたということでした。彼はその討論会で持ち出された議題の数をかぞえたあげく、整理すれば百四十二件にもなると言っていました。更に語るところによると、この番組は彼がそれまでに聴いたなかで最も啓蒙的な教育的な番組だったということでした。一つにはそれが現代社会の業績によく適していたからです。彼が理解できなかった事が一つあるということで、それは一体どうしてあれほどの多くの資料が私という一人の人間の小さな頭脳のなかに詰め込まれ得るのかという疑問です。

しかし私はこの旅行中に或る不愉快な目にも合いました。私と私のかつての秘書とが反対派に買収されたという噂が流されていたのです。私に関する限りこれは大ウソです。私から金を貰わねばならぬことがあっても、自分を売るようなことはしません。私にとって真理は黄金よりも貴重であるからです。

私はオランダの協力者レイ・ダクィラ女史の科学的な協力に衷心より感謝します。彼女が作製したスライド・フィルムに見られるような考古学上の諸発見は世界の人々を啓発するのに役立つでしょう。世の中はあまりに多方面の生活から成り立っていますので、我々はそれらすべての生活がそれぞれ独断的または狂信的な性質のものではないと考える必要があります。社会のあらゆる面には何らかの〝善き事〟が存在しているのであって、我々が地上で完全な生活を送ろうとするのならば、支持しなければならぬのはその〝善き事〟なのです。これが、何らの証拠も示さぬままにわけのわからぬ状態になっている神秘主義を我々が支持できない理由です。我々は、長いあいだ社会を毒してきた神秘主義のかわりに生命の実体のなかへ入りつつあるのです。

私は各国の協力者にたいして今しばらく忍耐強くあれと警告します。リンゴの実をならせるリンゴの木は一日で生長したのではありません。同様に現在の社会を一日で異なったものに変化させるほどの奇蹟も起こらないでしょう。それにはこれからの長いあいだ多くの困難な仕事を必要とします。ブラザーズが彼らの遊星で楽しんでいるのと同じような生活を我々が地球で持とうとするのならば、宗教的な儀式などを排除した上で社会の各層の善き物事のすべてが互いに結合されねばなりません。そして我々はこの世界の悪しきものを征服し得る前に、自分自身の自我（エゴ）を征服する必要があります。それは、誰かどんな人間なのかの問題ではなく、何がどうなのかの問題です。働く人たちのあいだに自我が広まるならばその結果は堕落です。一般人は自分たちのテーブルが何時どのようにして据えられるべきかについて各自の創造者に命令したがっています。それよりも、自分たちが謙虚になって創造者の導きと教えとに従いながらそれに奉仕をすべきです。この仕事はショウを演じたり誰が最もすぐれているかを見せたりするサーカスではありません。むしろ神聖な仕事です。

最近英国で〝発見〟（ディスカヴァリー）と題する科学雑誌に、細胞から細胞へ伝わる印象を研究している学者達の記事が掲載されました。彼らは著しい成績をあげたそうです。これは一九五八年に私が〝精神感応〟（テレパシー）と題する書物のなかで述べたのと同じ実験です。我々は少しづつ勝利を得つつありますが、それには年月と忍耐力を要するのです。

幽霊現象と霊界通信

C・A・ハニー

1. 今日殆どの人は想念がエネルギーすなわち或る力である事実に気づいています。しかし〝普遍的な力〟について我々は殆ど知っていません。ただ知っているのはその力が二つの作用を持っているということです。一つは引力であり、一つは反撥力です。この引力と反撥力は万物のなかに存在しています。我々は結果や作用によってのみ力というものを知ることができるのです。機械関係ではこの力がエネルギーとして知られていますが、心理学ではこれが想念・感情として知られています。

2. これと同じ型の力すなわちエネルギーが物体を形成する原子を存在せしめて、それを活性化しています。想念というものがどのようにして作り出されるのかということは「この引力と反撥力とによってひき起こされる一つの活動である」という以外に説明のしようがありません。この種の活動は〝親和の法則〟と呼ばれています。一定の吸引と反撥の運動を何が起こすのかは我々にはわかりませんが、ただ我々は、このような法則が存在すること、そしてその法則が「エネルギーを持つ物体を生み出すような工合に反応せよ」と化学物質に命令を与えている事実は認める必要があります。

3. あらゆる想念は、ちょうど家庭のラジオ受信機へ入って来る電波のように、振動として記録されます。あらゆる想念は空間を進行する一定の周波数または振動率を持っています。これはあたかもラジオ受信機を形成している或る要素に通信の信号を与える微小な電波のようなものです。これと全く同様に想念波動も万物を形成する細胞や原子の周囲に存在する力場を変調させているのです。

4. 我々は専門用語を用いないで、ただ各原子の中心は英知の火花であり、その周囲で発生している物事のすべてから発せられる印象を吸収するのだ、と言っています。原子または細胞は、印象自体を形成しているエネルギーすなわち力によって自己の力の場をわずかに変動してもらうことにより、この印象を持ち続けています。これはテープレコーダーがテープの磁場を変化せしめられることによって音声を貯える方法に似ています。正しい〝受信機〟ならばこの変化を探知して、貯えられた知識を再生するわけです。如何なる物質の原子ばかりでなく我々の肉体の各細胞も一つの想念発生機なのです。各細胞の周囲にある微小な磁場はテープのように接触して来る他のあらゆる磁場によって変化せしめられます。このことは、どの細胞も他の細胞によってこんなふうに「記憶されている」知識に「気づくようになる」ことを意味します。人体を形成している原子群は永遠を通じて幾度も利用されてきました。それらは物体化するごとに遭遇した体験の拭いきれない記録または記憶を持ち運んでいます。

5. 以上のことはいわゆる前世の記憶なるものの殆どを説明することになります。或る人は自分がかつてアレクサンダー大王であったという印象を受けて自我が得意になるかもしれません。実際その人の肉体内の数個の原子または細胞はかつてアレクサンダー大王の肉体内に存在したのでしょう。これらの細胞は前世の記憶を運び、本人にそれを伝えたのです。利己心と願望とが含まれているために、この種の思い出は通常王様や有名人の記憶が含まれていて、この世の現状から考えて、もっと存在してしかるべきだと思われる馬泥棒や乞食の記憶はめったにありません。すなわち自分は前世でかつて馬泥棒か乞食であったという人はいないのです。

6. 或る人々で、他の人よりも印象類にたいしてはるかに感受性の高い人があります。この人たちは見知らぬ家へ入るとただちに気楽に感じるかまたはときとして気がかりになることがあります。このような作用の原因は何でしょうか。

7. その家屋や家具類のすべての細胞にはその家の内部に存在している生活の雰囲気や想念などが浸み込んでいるのです。これらの細胞は印象類にたいして貯蔵庫の役目を果たしています。その微弱な磁場は人間が思考する場合に発生する磁場によって〝変えられる〟、つまり変調されます。この細胞群に印せられた記録はあなたのハイファイ電蓄用のレコードに録音されている音楽と同じほどに鋭く明瞭なのです。

8. あなたが初めて或る家へ入るとき、あなたの心はこれらの細胞から(通常)潜在意識的に受けとる印象に反応します。印象にたいしてあなたが感受的になればなるほど、あなたが家に入ったときに受ける感じは強くなります。霊能力を有すると考えられている人々は自己の周囲に存在するすべての印象にたいして高い感受力を持つ人なのです。我々が足を大地にしっかりとつけて、実際に起こっている出来事の真相を理解しさえすれば、この意味での〝霊力〟を持つことは悪いことではありません。しかし我々はどの印象を受け入れて、どの印象を拒否するかについての識別力を持つことがきわめて重要です。利己主義や我々の迷妄に有害な印象は拒否しなければなりません。我々は、望ましくてしかも宇宙の法則を反映するような印象を受け入れるべきです。

9. 殆ど誰もが夜間眠っているあいだに鮮明な夢を見ます。夢というものの正しい原因について我々はよくわかりませんが、それを〝霊魂〟または幽霊のせいにはしません。夢のなかで我々は耳で聞いたり目で見たりできる幻影を体験します。私がここで幻影というのは、夢のなかでの声や姿は夢を見ている本人の心のなかにのみ存在するのであって、同じ室内の他人はそれを見たり聞いたりはしないからです。人が眠っているときは、本人は潜在意識がセンスマインドの抑制を容易に放棄し得るほどに精神的に解放されます。すると潜在意識は夢を生み出し、耳で聞いたり目で見たりできるような完全なものとなるのです。

10. 人間がお化けや幽霊を見るという場合、右と全く同じことが起こります。この場合本人は眠っていません。目覚めているのですけれども、夢を作り出すのと同じ作用が、その地域一帯の強烈な細胞印象によって働き出します。あなたはこれらの幽霊をたしかに見ることは可能です。それは、その幽霊が実際には視神経から生じるのであって、全然肉眼で目撃されているのではないからです。それらの幽霊はあなたが自分の肉眼で見つつある像の上に重ねられているのです。

11. 幽霊目撃事件は通常悲劇と関係がありますが、これは死の際の緊張下にある精神が普段よりもはるかに強烈な印象を放っているからです。私がかつて聞いた一例をここに挙げてみましょう。或る淋しい地区で道路の危険なカーブの近くの路線橋のところに〝幽霊〟が出るというので自動車の常用者たちが恐れていました。一人の男の姿が突然出現するために、驚いた運転者たちはそれを避けようとして事故を起こしかけるというのです。そして衝突する直前にその姿が消えるというわけです。その場所で同じ事件があまりひんぱんに発生するために、いろいろな〝心霊研究家〟がその幽霊を見ようとして現場へやって来ました。

12. 真相を理解していた一人の男がその場所へやって来ました。彼は事故発生現場付近の土堤を下りて、そこで、上の路線橋から身を投げたか墜落したのか、とにかく地面から突き出ているパイプに身体がクシ刺しになっていた男の死体を発見しました。その土地は草がむどく生い茂

っていたので、死体は数年間未発見のままになっていたのです。

13. 調査の結果、その死者は事故（または飛び込み）後にちょっとのあいだ生きていたことが判明しました。この男が死ぬ前に起こしたと思われる激烈な感情をあなたは想像することができますか。彼は必死になって助けを求めたわけです。それで彼の死ぬときの想念は、その苦痛と、そしてそんな場所で自分を発見することはできないだろうという考えでもって凄まじいまでに激化していたわけです。まさに死なんとする男の想念は在に述べたような影響をそのあたり一面の土地に浸透させたのでした。つまり、その地域の樹木群や細胞群から発する変調された磁場は彼の死後も存在し、彼の死の願いが成就されることによって吸収されるか中立化されるまでは存在し続けたわけです。当然、死体が発見されたあとは、その幽霊は出なくなりました。

14. 車を運転した人たちのなかには細胞の印象にたいしてきわめて感受的な人もありましたので、この人たちの潜在意識がその細胞群の刺激に感応して死者の「注意を引き寄せたい」という願いを再現させたのです。この再現は、あなたが眠っているあいだに見る夢と全く同じように〝心の目〟で蘇生させられたのです。

15. これと同様にして、人々のなかにはかつて愛したことのある死者の姿を見る人もあります。細胞の印象というものは死者の正確な姿、想念、声などを持ち運びますので、その幻影はきわめてほんものそっくりに現われるのです。私が強調したいのは「降霊実験会などで死者と面会（コンタクト）した人はいない」ということです。死者の細胞の印象または生前の印象及び想念こそがごくまれに起こる心霊現象の有力な原因なのですが、これはべつに故意のインチキということにはならないでしょう。

16. 潜在意識は〝全知〟と接触を保っていますので、恍惚状態（トランス）や半恍惚状態から夢幻的な物事が起こって来るのも不思議ではありません。ジョン・ニューブラフ著の〝オアスペ〟はこんなふうにして印象から感受して書かれた書物です。霊魂や昔の巨匠などはかかる現象に何ら関係はありません。それはすべて本人の全生涯中に接触するようになったもろもろの印象からこの書物の資料を集めている潜在意識の作用によるものなのです。このことはその資料が多くの知識ばかりでなく、多くのナンセンスな物事を含んでいることをも意味します。我々がかかる資料を調べるにあたって注意深く識別し、それを人間よりも優位な権威あるものと仮定しなければ我々は大丈夫です。私はあらゆる物事を読んだり調べたりすることを決して否定するものではありませんが、常識というものも必要だと思います。

17. しかし恍惚状態（トランス）で感受された資料のなかには私自身もぜひ読んで検討しなければならない重要なものもあります。たとえば、エドガー・ケイシーの哲学がそれであって、これはブラザーズの哲学に比較して九〇パーセント正しいものです。しかし一般にかかる方法で感受された資料の殆どは子供だましなものであり、真理の言葉というのが沢山出てきます。

18. 一九五八年にアダムスキ氏と私が講演旅行に出かけていた当時、我々は一人の婦人に会いましたが、彼女は軽い恍惚状態（トランス）になっていたとき、自働書記の方法によって宇宙人（ブラザーズ）がコンタクトしてきたとしきりに話すのでした。テストとして、アダムスキ氏が、この次にそれを行なったとき、これこれしかじかの名前の宇宙人からメッセージを受信してみてくれと依頼しました。するとたしかにそのメッセージは受信されたのです。あとでアダムスキ氏は、そんな名前の宇宙人は存在しないのであって、その名前はA氏がわざと即席に考えた仮空の名前であると決らしま

した。つまり彼女の潜在意識そのものがそのようなメッセージを生み出すことを証明するためだったのです。彼女はついに納得しました。この種のメッセージなるものの殆どはその背後に実は実験者の「こうあって欲しい」という希望的観測が原因をなしているのです。

19. このことが、ブラザーズがその計画において科学的かつ論理的な前提のもとの堅実な基礎にもとづくことを望んでいる理由です。前述しましたように、心霊研究グループが円盤問題に立ち入らないで自分の本来の持場にとどまっている限り、私は彼らと何ら争うものではありません。心霊学や神秘主義は他の遊星の人類とその計画などに何の関係もありはしないのです。ブラザーズはとっくの昔にそんなものを超えて進化しています。

20. 私は人々に「座って体をゆったりと休ませて、自分が受ける印象のすべてを書きとめなさい」とすすめています。これはそれ自体わるいことではありません。実際には望ましいことなのです。ただし、もしも我々が受けとる印象を何かの霊魂のせいにしなければです。そこで我々は感受する印象を二種類に大別しています。一つはセンス・マインドの産物で、一つは宇宙の法則と融合したものです。我々は前者を完全に投げ捨てて、研究と同化のためには宇宙の法則に一致した後者を選ぶことにしています。

（十三頁より）ろが、大抵のいわゆる〝霊魂遊離現象〟なるものは恍惚状態と関係があって、〝空想〟と「こうあって欲しい」という希望的観測によって起こります。これは別項の〝幽霊現象〟の記事で述べましたように夢の作用で起こるのです。正しい意識の拡張は恍惚状態を必要としません。遠隔透視をしつつあるあいだも肉体はその正常な活動を続けます。

質疑応答

C・A・ハニー

〔問1〕他の遊星では地球の聖書と同じ書物を用いていますか。（ノースキャロライナ州、エドナ・T・ロバートスン夫人）

〔答〕ブラザーズは数百万年のあいだこの地球上の過去の歴史に関する記録を持っています。彼らは地球で聖書が用いられているようなふうに使用されている書物を持っていません。このことはアダムスキ氏の〝円盤との談話〟中に詳細に述べてあります。次の質問を参照して下さい。

〔問2〕ブラザーズは神を信じていますか。

〔答〕この質問には以前に答えたことがありますが、最近多数の読者から同様な質問をいただきますので、ここでもっと詳しく答えることにします。もちろん彼らは〝神〟を信じています。彼らは地球人よりもはるかにそれを畏敬しているのです。彼らはその信念を生かした生活をしているのですが、大抵の地球人は神について語るだけです。彼らブラザーズは教会というものを持ちません。というのは彼らの日常生活そのものが我々の言う宗教ともいうべきものであるからです。彼らは宇宙の法則についてきわめてすぐれた理解を持っていますので、地球のように宗教的な教えと日々の生活とのあいだに分離はないのです。創造者の家のなかには万物の永遠の融合があるのです。

高度な理解力を持つ彼らは、人間を見るのに単なる〝人〟としてでなく、生ける状態にある霊なる〝神の英知〟として見るのです。各個人の中心にある英知、各個人の中心にある英知は〝至上なる英知〟の一部です。〝才一の因（神）〟すなわち〝至上なる英知（何と呼ぼうともかま

いませんが）〝は大いなる海にたとえることができます。或る意味では、海水の一滴は分離した小さな実体とも考えられますし、別な意味では海水の一滴は〝全体〟の一部とも言えます。なぜならその一滴は全海水中のあらゆる体験を知る力を持っており、結局その知覚力は外方へ拡がるからです。と同時に海洋の体験も絶えず進歩しますので、水の各一滴に関する限り、それは知識の拡張で終局に達することはありません。

言いかえれば、〝才一の因〟はそれ自体の内部の進歩に終わりということを知らないのです。〝才一の因〟の意識は、その〝因〟のもろもろの結果を観察することによってのみ我々の方へ来ますので、我々は常に期待すべき高度な事故を持つことになります。

〔問3〕ブラザーズが地球人のなかに混じって生活するようになってからどれくらいになるのですか。（シアトル、F・N）

〔答〕アダムスキ氏の *Inside the Space Ships* 中の記事を直接に掲げることにしましょう。

――答えたのはルナである。「ご想像以上の太古からですわ！そうですね、少なくとも」と彼女は訂正した。「過去二千年間は続いています。地球人を救うために遣わされたイエスの磔刑以後――イエス以前にも地球で生まれかわるように派遣された人々がいたのですが――地球上で誕生させるよりも、関係者にとってもっと危険の少ない方法で宇宙人の使命を続行することに決めたのです。これは宇宙船の大発達によって可能になったのですわ。現身のままの志願者を連れて来ることができますけれど、この人たちは使命を果たすために注意深く訓練されていて、個人の安全に関する教育を受けています。本人の正体は、一定の目的のためにごく少数の地球人以外には絶対に洩らしません」（註。邦訳版〝空飛ぶ円盤同乗記〟より引用）

〔問4〕もし我々が生まれかわるときに過去の記憶を失うとするならば前世で学んだ知識をどのようにして思い出すのですか。（キャンザス市、D・L・C）

〔答〕前記の著書の一八五頁（邦訳版一四九頁）をお読み下さい。

〔問5〕円盤現象が発生した場合に飛行機が行方不明になったりする理由を説明して下さい。敵対行動をとる円盤がいるのですか。（シアトル、F・N）

〔答〕敵対行動をとる円盤が出現したという結論に至るような証拠はこれまでにありませんでした。そのような円盤が現われたという報告の殆どは目撃者の恐怖心と病的興奮によって起こった誤解です。たびたびの飛行機の墜落事故においてその前後に円盤が現われたことは事実です。しかし円盤がその事故の原因ではありません。ごくまれに飛行機が円盤に接近できてその磁場内に入り、そのために空中分解を起こしたことは私も認めますが、これは円盤側の敵意によるものではありません。（かつて発生したマンテル大尉事件はその一例です）

近年は円盤側が地球の航空機の接近を避けるようにしていますので、かかる事故は殆ど発生しません。ここにアダムスキ氏の解説を掲げましょう。「核爆発後に原子雲がどのように見えるかは誰も知っている。この雲はエネルギーの集中した塊である。これは上空を移動するにつれて爆発によって吹き上げられた塵埃を落としながらそれ自体が目に見えぬ状態に変化してゆく。そしていつまでもこの状態を続けてゆくのである」

ときとしてこのエネルギーは中心部に向かって激烈に集中することがありますので、自然に一つの爆発が発生するのです。この結果、原因不明のパニック・ブームが起こります。ときどき、このエネルギーの集中化は自然爆発の直前に目に見えることがありますが、これが空中を飛ぶ

緑の火球と言われているものです。

ここで再びP氏の説明を引用しましょう。「もし飛行機がかかる不可視の雲に衝突すると機体は爆発するか分解して、観測者の目前で消滅するように見えるのである。二、三の機会に宇宙機がレーダーに捕えられたり、或る場合には消滅した飛行機の付近に宇宙機が目撃されたりしたために、宇宙船が飛行機をさらったのではないかと思われていた。しかし私が聞いたところによると、航空機の探知装置が不備なために、前記の〝雲〟のなかに突入するとパイロットは死ぬことをブラザーズは知っているのである。この悲劇を避けるためにブラザーズはできるだけ早く〝雲〟に到着して救援するよう全力を尽くしている。

しかしこれまでに航空機がその〝雲〟に突入すると同時に円盤がそこへ到着した例があった。このような場合は円盤といえども傍観するよりほかに仕方がなかった。ひとたび航空機がかかるエネルギーのポケットへ飛び込むと搭乗員も機体も救出することは不可能であるからだ。そこでブラザーズはかかる惨事を防ぐためにその目に見えない〝雲〟の現場作業を続けているのである」

〔問6〕あなたが言っておられる〝センス・マインド〟というのはどういう意味ですか。誕生の際に我々の記憶が拭い去られるとすれば、この世で自分にとって有益な、前世の体験で得た知識を、我々はどのようにして保持するのですか。（キャンザス市、D・C）

〔答〕この記憶は現在の発達の段階においては殆どの人々によって意識的に持ち運ばれてはいません。そこで最初の質問にお答えしましょう。

もしあなたが〝意識的な心〟、〝潜在意識的な心〟と言われれば、大抵の人はあなたの言わんとすることを理解するでしょう。いわゆる〝意識的な心〟は我々が自分の行動を制御するために日常用いている知性です。それは浅気な弱い心であって、肉体の各感覚器官から各種の印象を受けとり、ただちにその心自身の意見を簡単に作り上げます。その心は、不安定なもの、恐怖、その他やって来る感情の動揺などに屈従しやすいのです。それは各感覚器官に屈従しやすいために、或る人々によって〝カーマル・マインド（肉体の心）〟と呼ばれていますが、アダムスキ氏と私は〝センス・マインド（感覚器官の心）〟と呼んでいます。

いわゆる潜在意識の心は実際には宇宙の英知をともなった意識の中にある心です。それは肉体を建設してそれを支えている人間の内部の〝魂の心〟でもありますので、我々二人はその心を通常〝意識的な心〟と呼んでいますが、一般の人はこの定義をよく知りませんので、私はやはりその心を〝潜在意識的な心〟と呼び続けることにしましょう。しかしこれは右に述べたようにきわめて深い意味を持っています。またセンス・マインドに関連してアダムスキ氏著〝宇宙哲学〟から次のように引用しましょう。

「我々が自分を意識的な知覚のより広い状態に導き入れるためには、センス・マインドから〝全知の意識〟へ制御力を譲渡しなければならない。そうすることによって我々は肉体をその自然の状態に変えるのである。我々が心のなかで扱っている意識的な想念は我々のほうへ類似の状態を引き寄せる。もし我々が真実在としての自己の意識的な知覚力において拡がることを望むならば、我々はすでに役立ってくれた過去の各状態をその適当な場においてやらねばならない。

人間の何たるかを知ってから、次いで望む物をしっかりとつかみ、望ましくない物を意識的な（表面的な）センス・マインドから排除しなければならない。我々の望む物がそのとき所有するのに正しい物であるならば、我々は必ず結果を得るのである。そうでなければ別な適当な時機

に必要な物が手に入るだろう」

〔問 7〕あなたのニューズレターには（註。ハニー氏のニューズレターの意）アダムスキ氏のその後の新しい体験が掲載されますか。また、ア氏は新しい書物を書いていますか。（フロリダ州、E・O）

〔答 〕これは全くア氏次第です。氏は新しい体験を書いてニューズレターに発表するかもしれませんし、そうしないかもしれません。氏は現在新しい書物を書いていることを私は知っています。

〔問 8〕宇宙の支配系統について教えて下さい。宇宙には〝主なる神々〟〝多くの上帝〟、〝神々〟といったものが存在するのですか。各遊星は各自の神を持っているのですか。（アーカンソー州、L・F）

〔答 〕このような名称または支配系統は心霊研究上の刊行物に出て来るだけで、存在はしません。高度に進化した遊星はすべて自然の法則（宇宙の法則）に従っています。そこの住民は命令者や指導者などを必要としません。これらの進化した遊星のいずれも、全住民から選ばれた一団の代表者がいます。けれども立法機関というものは殆ど必要ありません。彼らは全住民の共通の福利のために働いているのです。

主なる神々、上帝といった誤った概念はオアスペに載っていて、心霊研究界にひろまっています。恍惚状態で感受された情報は真実とはいどくかけ離れた誤りを含んでいて、別な面からの証拠がないので、真実の情報として頼りになるものではないのです。こうしたメッセージ類は個人の潜在意識から来るのであって、本人がかつて読んだり聞いたり話したりした物事に基づいているのです。かかるメッセージについて多くの書物が書かれていて、すべては何かの進化した宇宙人またはその霊から来るものと信じられていますが、そんなことはありません。こうしたメッセージがどこから来るかは別項の〝幽霊現象と霊界通信〟をお読み下さればおわかりになるでしょう。かかるメッセージ類に出て来るごくわずかな〝真理の言葉〟のために多数の人はこれが或る高級霊から来る真実の言葉であると考えてその全部を受け入れていますが、我々は生さたブラザーズから真正の完全な知識を望むか、それとも古い迷信に執着することを望むかは、自身で決める必要があります。多数の、いや、実際には殆どの円盤研究グループが心霊上のコンタクト例に執着したがっていて、これは真実のブラザーズの真理に抗することにもなります。アダムスキ氏が何度も言って来たように、彼らはサイレンス・グループにとって最大の資産であるのです。

〔問 9〕私は進化に関するあなたの説明に同意できません。種は長いあいだの自然淘汰によって変化するのであるというのが私の持論です。その証拠もあります。これについて科学者はどのように言っていますか。（シアトル、F・N）

〔答 〕自然淘汰は新しい種を創造もしなければまた創造することもできません。自然淘汰の唯一の機能は、退化が起ころうとしたならば、それを防ぐことにあります。それは最上なるものを生き残らしめますが、それを生み出すことはしません。もし他の動物よりも少々異なる動物が生まれれば、他の者たちはそれを襲って殺します。これが種族を変化のないままに保とうとする自然のやり方です。ダーウィンは〝種の起源〟を書いてからだいぶ後に、友人のジェレミイ・ベンサムに手紙を送って次のように言っています。「詳細に調べてみると、我々は種が変化することを立証できませんし、私の説の土台である例の仮定された変化が有益なものであるということも立証できません」

自然淘汰は種を退化から防ぎますが、それは変化したのをそのまま存続させません。右に述べましたように、動物が変形したままで生まれる

ならば、そして通常のものから何かの変化がこんなふうに現われるならば、それは他の仲間によって殺されます。動物や植物を育てる人たちが何度も立証しているのは、如何に多くの小さな変化が起こされても、彼らはまもなく実験の行き詰りに来て、その方向でそれ以上何も達成されないということです。それ以上の努力は無駄なのです。

植物や動物が身につける特徴はその子孫に伝えられはしません。環境にたいする適応は起こりますが、これは遺伝されません。自然淘汰も、身につけた特徴の遺伝も新しい種の説明にはならないのです。

進化論を守って書いた人々は〝種〟という言葉の定義をよく知らないのです。何かの特殊な種族から新しい犬の種を発達させることが可能でしょうか。否です。なぜなら、新しい種ということになれば犬の型とは別なものになる筈であり、そして新しい種を作り出そうとしてもそれは犬のなかの新しく変化した犬ということになるからです。進化論者によって新しい種と考えられるものの殆どは、一種類のなかの、一種族のなかの〝変形〟形〟にすぎません。これは容易にわかりになるでしょう。我々は地球上に多種類の人間、多種類の形をした人間を見出していますが、それらはすべて同じ人間という部類に入ります。結局、人間はあくまでも人間なのです。

一種属のなかで多くの異なる変形が生ぜしめられますが、一つの種を全く新しい種に変えることはできません。現代の科学は植物や動物のなかにほんとうの種の変化を起こした証拠を発見したという記録を持ち出そうとする人にたいして私はなおも否定します。なかには、かかる証拠は存在するのだられども忙しくて調べる暇がないと言う人があります。また書物の題名を知らせてくれて、それを読めといって来る人もあります。もしかかる証拠が実際に存在するのならば、その書物のどのページを読めばよいかを直接知らせていただきたいものです。そうすれば私はそれを調べましょう。手紙をくれる人自身が、どのページのどの節が自分の主張を支持するのか知ってもいないほどの疑わしい物事をせんさくする条件は私にはありません。

〔問 10〕あなたは人類学上の多くの発見はいかがわしいという反証があげられてきたと述べられましたが、科学上インチキまたは誤りとして考えられている遺物のすべてをあなたは解明し得ないと思います。こうした遺物が実際には何であるかをあなたはまだ説明していません。（フロリダ州、D・C）

〔答〕 私が言及した遺物は次の通りです。スワルトクランス人（歯）、ジャワ原人（あごと歯）、ハイデルベルク原人（あご）、ネアンデルタール人（頭がい骨）、オーストラリアのワジャウ人（頭がい骨）などです。

私は先史時代の人間存在の証拠すべてがインチキだというわけではありません。これらの発見物はたしかに真正なものです。ただ誤っているのはこれら発見物にたいする誤った解釈です。一例として、歯またはあごの一部が発見されますと、科学者達はその材料から完全な人体骨格を復元します。すると世界の人々は科学者が示す復元模型を間違いないものと思い込むわけです。ところが、こうした復元体の殆どは外観がまるでサルのような姿をしています。皮膚、唇、鼻などがサルのように見える要因をなしています。しかしこれらはまだ発見されていない全身のなかの一部分にすぎません。かくて、こうした古代人の復元模型のすべてはきわめていかがわしいものになっています。これらの模型はそれを製作した人たちの先入観をあらわしているだけで、真実をあらわしたものではありません。

この模型から見ますと、人間は進化したというよりも外観では退化しています。今日、まだ世界には穴居生活をしている原始民族が残れして、なかには言語を持たず、火の使用さえ知らないのもいます。過去において穴居人類は高度の文明を持っていました。

〔問 11〕アステロイド帯は過去に爆発したルシファー・マルデクという遊星の残がいなのですか。アダムスキ氏はこのことを支持していないようですが―。（アーカンソー州、L・F）

〔答 〕アダムスキ氏によれば、他の遊星のブラザーたちはこんな遊星がかつて存在したこともなければ核爆発によって吹き飛ばされたこともないと言っそうです。アステロイド帯が、爆発した遊星の残がいであるというのは、心霊的な源泉から出たもので、この場合、頼りにならぬばかりか大ウソでもあるのです。

〔問 12〕最近或る人が語ったところによりますと、ブラザーズは指紋を持たないということですが、これは真実ですか。（ロサンジェルス、F・N）

〔答 〕アダムスキ氏と私がこれまでに会ったことのあるブラザーズのすべては、あなたや私と全く同様の指紋を持っていました。この紋様は宇宙的、普遍的なもので、人類の想像とは関係がありません。多数のサギ師が宇宙人だと自称していて混乱を起こしている事実を忘れてはなりません。私の考えでは、こうしたサギ師のなかには、真実の宇宙人に関する真相を敏感的に暴いてやろうとしている彼の人々から報酬を受けとって芝居（ドラマ）を演じている人がいるようです。かかる二セ宇宙人を見分けるのにすぐれた論法を応用しなかったことは別として、だまされた人々を我々は非難することはできません。当人たちはまじめなのでしょうし、あくまでもホンモノのブラザーズとコンタクトしたと思い込んでいるのでしょうから―。

〔問 13〕ブラザーズを援助しようとしている地球人についてブラザーズはそれを知っているのですか。またこの特殊な地球人たちの人物や生活態度をブラザーズは熟知していますか。（コロラド州、E・H）

〔答 〕もちろんブラザーズは知っています。彼らは我々が自分自身を知る以上に我々のことをよく知っているのです。そのためにこそ私はユーズレターを発行し始めたのです。それはブラザーズについて多くの知識を望んでいる人々に正しい知識を伝えることにあります。各記事にたいするいろいろなアイデアや暗示などが読者から寄せられていますので、あなたがたが知りたいと感れる事柄を載せることになります。将来は写真を載せたりして、ブラザーズから直接与えられる知識をお伝えしたいと思っています。また遠からぬ日に、私がやっている仕事がブラザーズと地球の科学者たちの協力から大きな支持を受けている真実について文書による証拠を提示したいとも思います。

一方、次の論説と理由によって私の資料を判定して下さい。そして最も穏当の通った知識を提供している方は誰であるかを決めて下さい。そうすればあなたは困難な時代に日和見主義者からだまされることはありません。

〔問 14〕"生まれかわり"はどのようにして起こるのですか。如何にして一個人が一つの肉体から別の肉体へ移りゆくことができるのか、私にはどうもわかりません。（ケンタッキー州、J・H）

〔答 〕これはブラザーズの科学の部分で、我々が実際に理解したり考えたりするのに最も難しい事柄です。第一に、この"生まれかわり"を信ずる人たちによって提案されてきたような輪廻の教えでもって混乱してはいけないということです。

〝生まれかわり〟の真相は者人が自分自身の論理と理性によって知らねばならないものです。〝生まれかわり〟というものはあり得ないと断定すべき根拠は存在しません。〝生まれかわり〟はブラザーズによって積極的に立証されてきたのであって、それは〝事実〟なのです。結局我々は好むと好まざるとにかかわらず、それを認めねばならぬようになるでしょう。それは実際、筋道の通った正当な唯一の哲学なのです。私はこれほどに純粋な常識を形成している哲学というものを知りません。私は言葉を通じてあなたを納得させることはできませんが、どのようにして〝生まれかわり〟が起こるのかを考えるのが容易になるかもしれない説明をすることにしましょう。

かりにあなたが三十二才であると仮定します。最新の医学によれば、人間の皮膚の細胞(表皮)は六ヵ月ごとに変化するといわれています。七年たてばすべての肉体と骨を含む全身の細胞が次第に更新されます。そしてその時期の終わりには肉体を形成する全細胞は七年前の細胞とは全然別なものとなります。

このことは、もしあなたが二十八才から三十二才くらいまでの人であるとすれば、あなたは実際には少なくとも四つの異なる肉体を持って生きてきたことになります。実際その変化は緩慢ですけれども、あなたは七年前よりも現在はまるで違う肉体を持っているのです。

あなたはその変化を感じませんが、やはりあなたはあなたなのです。そして、古い肉体とあなたとを結びつけている唯一のきずなは〝記憶〟です。あなたは七年以上も前に体験した物事を思い出すことができます。しかしあなたは変化する肉体について意識的な知覚力を持っていません。このことからしてわかるのは、あなた自身は、日々新しい形に変化してゆく肉体を住家とするところの〝実体〟または〝記憶〟なのであるということです。意識的と潜在意識的の両面に及ぶこの記憶は明らかに肉体とは別に独立しています。脳細胞でさえも七年ごとに置きかえられます。あなた自身とあなたの記憶とはあなたを取り巻く物質の家(肉体)に宿っているのではありません。

あなたの記憶全部をテープに記録して保存することが可能だとしたらどうでしょう。そしてその記録された記憶を生まれたばかりの幼児の脳の記憶層に移すとします。すると結局これはあなたが七年ごとに新しい肉体を持つことと変わりはありません。あなたは依然としてあなたです。あなたは以前の体験のすべてを思い出すでしょうが、新しい幼児の肉体のなかにいることになります。これは〝生まれかわり〟というものが、ただ新しい肉体を必要とすることにすぎず、新しい器械にほかならないということを意味します。まだ説明すべきことが多くありますが、以上の説明は生まれかわりがどのようにいとなされるかを表わしています。

たとえ法然に生命が絶えないとしても、我々がかかる記録装置を発明して古い肉体から若い人の肉体へ記憶を移すとすれば、自分でその奇蹟をなしとげることができるでしょう。そしてそれをもっと実用化させれば我々は望ましくない特徴を持ち越さないように記憶の塊を発達させることができるでしょう。我々は正しい道に沿っての発達のレッスンを学びとろうとしない記憶を絶滅させることによって宇宙の法則に従っている物事を発達させて、その他すべてのものを削除することができる筈です。

記憶の転移が実際には如何にして起こるのか私にはわかりません。右の説明からして、このような事が決して不可能ではなく、実際はそれに関するあらゆる事実が完全に決らされるならばきわめて簡単であるにちがいないことがおわかりになるでしょう。地球人はまだそれにたいして

準備ができていないのです。

現在我々は〝生まれかわり〟なるものについてはブラザーズが教えてくれただけのことしか知りません。そして、我々が完全な説明にたいして準備がととのうほどに発達するとき我々はそれを教えられることもわかっています。たとえあなたがそれを実際に信ずることができず、内部にそれを感じることができなくても心配する必要はありません。研究を続けて他の線に沿って発達することです。

〔問 15〕心霊学上で用いられる言葉についての質問ですが、次のものは存在しますか。〝オーラ〟〝第三の目〟〝霊体〟〝霊魂の遊離現象〟

（アーカンソー州、L・F）

〔答〕人体はいわゆる〝オーラ〟で取り巻かれています。これは地球を取り巻く大気圏に比較できる一種の磁場のようなものです。これはその性質においてちょうど光と同様に電磁的なもので、その共振波は通常肉眼では見えませんが、例外として見える場合もあります。

〝第三の目〟というのは松果腺につけられた名称ですが、これに関する物語の殆どはこれを過大評価しています。

〝霊体〟は、あなたが肉体の背後にある〝英知（宇宙の魂）〟を霊体と呼ぶならば存在することになります。

〝霊魂の遊離現象〟は或る現象にたいする誤った名称です。人間の意識が正しく拡げられるならば、本人は遠方で起こる出来事に〝気づく〟ようになることができます。この場合肉体を遊離して本人自身でその場所へ行ったかのように感じますが、実際には本人は肉体を離れているのではありません。もしほんとうに離れたのならば肉体は死んでしまいます。我々はみな如何なる遠方の場所で起こる出来事にも〝意識的に気づく〟ようになる力を持っています。恍惚（トランス）状態はこれとは違います。とこ

（六頁上段に続く）

ブラザーズと哲学

C・A・ハニー

私が従来の地球上の哲学を無視しているといって非難する人があります。毎号私が書いている哲学はブラザーズによって教えられたもので、その殆どはアダムスキ氏を通じて与えられた知識です。私はブラザーズの哲学をお伝えしようとしているのであって、地球の単なる個人的な好みの思想を支持しようとしているのではありません。といって私のお伝えする哲学が唯一の真実の知識であるというわけでもありません。しかしブラザーズの哲学が地球の多くの哲学書の内容とは大違いであることを私は知っています。

ブラザーズは地球の我々よりもはるかに高度に進化しています。多くの人々が私に手紙をよこして、ブラザーズが何を考えているか、何を信じているか、また生活様式を改善するのに何をやっているか、などについて知りたがっています。それで、ブラザーズが生活の基本としている哲学は、多くの知識にたいする欲求を満たすために提示されつつあるのです。

私が一九五七年にアダムスキ氏への協力を始めた当時まで、私は如何なる種類の哲学にも興味はありませんでした。時がたつにつれて、私はブラザーズの信念に関する深遠な教訓に興味を持つようになり、その点についてA氏から教えられたのです。A氏は多年長いあいだ哲学の教師でありましたので、東洋と西洋との両方にわたるさまざまの哲学に精通していました。しかしA氏がブラザーズと接するようになったとき、ブラザーズはA氏の考え方のなかにあった誤りを訂正しましたので、A氏はそれによって考えなおした上で最後的な結論を他人に伝えたのです。

ブラザーズは地球の哲學的な〝あがき〟をはるかに超えて進化していますので、私自身はこの地球の個々の多数の哲學書を読んだり研究したりして時間を浪費する必要はないと思っています。それよりもブラザーズとアー氏の両方から私の学び得るすべてを学びとることに全力を注ぐことにしています。ずっと昔、ブラザーズはもみがらと小麦とをより分けてしまったのです。そして私が心から満足に思うのは、彼らの哲学は生前及び死後を通じて生命のあらゆる面にわたっていることです。私は彼らが私に聞いてくれた無限の知識の海に直面しているのであって、それゆえにこの地球上での教えのかわりにその方へ努力を注ぐつもりでいるのです。

私のニューズレター中に載せる論説や説明などは私自身の個人的な説としてでっちあげたものではありません。私がさまざまの現象にたいして与えた多くの説明は数年前にアー氏から最初に聞いた事柄です。

心霊現象と神秘主義は因盤・ブラザー問題と何の関係もないという私の説明に立腹している人々があるようです。そうだとすれば私は怒っている人々に感謝しますが、しかし私の説明はブラザーズから直接に聞かされたもので、真理を広く知らせようという関心のもとに掲載されました。私のと同じ内容の記事はアー氏の各著書の随所に見られます。しかし私たちの記事は他人の信念を傷つけることにあるのではありません。人は自分の望ましいことを信ずる自由があります。心霊現象や神秘主義を信奉したい人はその自由を持っているのです。しかしブラザーズに従いたい人は自分の考え方を考慮してみる必要があります。

ブラザーズは我々の発達を援助しようとして彼らの知識を我々に与えているのです。彼らは地球人の持つさまざまの考え方を粉砕しようとしているのではなく、はるかに論理的で科学的な新しい思想をもたらしつつあるわけです。したがって、我々の持つ既成概念の何かが路傍に脱落するならば、それは我々が進歩していることを意味します。

なぜ或る人々は高度の知識にたいして立腹するのでしょう。なぜ人々は迷信から生長した科学的知識に欠ける古い考え方に従おうとするのでしょう。我々は過去の古臭い考え方に執着することなく新しい善き物事を絶えず期待しようではありませんか。

人々は自分の誤りが指摘されると立腹します。もしそれが既成概念に沿ったものならば何も言わないくせに、誤りを指摘したものならばただちにそれを拒絶します。つまり回答が個人の一定の信念に適しなければ本人は敵対的となり、多くのトラブルが起こるのです。

高度の進化という性質によってブラザーズはまだ地球人が解決していない諸問題にたいする回答を持っていると思われています。しかしこの解答が我々が予想している事柄とひどく相違するならばどうなるでしょう。我々は教会で教えられた事柄によってブラザーズの教えを判断することはできません。これは教会の教えが間違いないという証拠を我々が持たないためです。ブラザーズの教えは結局、個々の信念かまたは正しい論理的な考え方によってのみ量られねばなりません。

「聖書が教会の教えの正しさを立証している」と宗教家は言うでしょう。なぜ正しいのですかと聞けば「それは霊感によって書かれた神の言葉であるからだ」とお答えになります。では、どうして宗教家は聖書が霊感によって書かれた神の言葉であることを知っているのですか？「それは聖書中にそのように書いてあるからだ」と言われますが、この種の論法は全く意味のないものです。この種の論法は今日到る所で見られる誤謬です。これは全く、真実の証拠は何もないのに自己の信念を立証しようとしているだけのことです。

高空核実験による影響

C・A・ハニー

太平洋における高空核爆発以来、多くの予期し得なかった出来事が起っています。二、三の激烈な物事が起こる筈でしたが、ついに起こらずにすみました。しかし爆発の結果として他の物事が起こるかもしれません。

地球の気候は異常な状態に変化するかもしれませんし、異常な気候が一九六三年にも続くかもしれません。この理由は次の通りです。爆発位置の高度如何によっては、核爆発はアンバランスな状態をひき起こし、それがヴァン・アレン帯から莫大な量の〝熱い〟微粒子を解放させることになるのであって、もしこれが突然に地上へ降り注いだならば人間は全滅することに違いなしです。

かかる物事について知識があると称する多数の科学者は、爆発は一つの竜巻きのなかに解放されるエネルギーに比較すればその強さがきわめて小さいので、核実験はとるにたりないものであり、気候に影響を及ぼすことは全然ないと言っています。しかし私は科学者達が或る重大な事実を見落していると思います。

高空の核爆発は発電機として作用し、爆発の高度が高くなればなるほど発生する電流は強烈になるのです。この電流は微粒子に電荷を帯びさせて磁場(複数)を作り出し、それが大気圏上層の気流を大きく変化させる可能性があります。するとこの変化した気流は気候を変えるというわけです。

この核爆発というのが莫大な量の荷電微粒子を放出して、それが一時的に地球の磁場をゆがめることもよく知られています。地球の磁場の如何なる変化もただちに電流を発生させます。この原理は自動車の発電機の磁場内を導線を動かす原理と同じです。

爆発が起こった場合に実際には何が発生するでしょうか。先ず誘導電流が陸地と海の表面に流れます。そして消滅するまでに地球を数回廻ります。この電気的な衝撃は光速で進行しますので、適当な探知装置があれば高空で爆発が起こったことを知らせるでしょう。このような爆発は誘導電流のために、必ず探知され得るのです。

爆発の瞬間に電波の完全な消滅現象が起こり、爆発後十四分四十秒でそれが発生しました。この電波消滅の時間の長さはやはり爆発地点の高度如何によります。

我々はかかる爆発は容易に探知され得ることを知っていますので、これ以上高空の実験は行なわれないものと思われます。科学者のなかにはかかる爆発を恐怖する人もあります。もしそれが地球の周囲の水素の層のなかで起これば連鎖反応を発生させるかもしれないというわけです。そんなことはないと言う人もありますが、我々にはわかりません。

かかる爆発の結果として気候が変化するかもしれないという別な理由は、地球の上空で太陽から来る各種の放射線を防ぐ壁として役立っている荷電層の変化にある。この層は太陽や宇宙空間から来る放射線を防いで我々を保護するばかりでなく地球へ降り注ぐ赤外エネルギーを防ぐワナとしても役立っている。この防壁とワナがなかったら我々は外部から来る危険な放射線の攻撃を受けて、内部から起こる熱を失うことになるだろう。そこで温度が冷えるにつれて気候が変化することになるのである。

また地球の周囲の磁場その他のフィールドのゆがみによって別な影響

が甚だ容易に起こる可能性もあります。たとえば、地域によっては激烈な熱波や寒波が発生するかもしれません。これはかかる極端な温度が知られなかった地域に発生するでしょう。

地球磁場の変化は各地に地震を起こすことが容易に考えられます。これら人工の変災のすべては数年前に太陽の磁極が逆転したときに起こった各フィールドの変化によって促進されるでしょう。この文明は過去の偉大な有文明が存続したのとちょうど同じ期間続いてきています。あまりにも多くの知識が悪用されるとき、それが人間を絶滅させることになるわけです。

地球、八時間震動す！

約一年前の一九六一年六月六日に、地球はかつて記録されたことのないほどの大震動を八時間にわたって起こした事実が一九六二年四月十六日に地質学者によって明らかに出された。

この学者はコロンビア大学のレイモント地質学研究所のジャック・オリヴァー博士である。彼の語るところによると、二十七秒おきに発生したこの震動の震源はまだ全然解決されていないという。彼自身この震動はギニア湾のアフリカ沿岸を襲った高潮によって発生したものだと信じているが、別な説によると、これは大西洋の海底下に存在する錆びた物質のためだということである。そしておそらくアダムスキ氏は正しいものとなるだろう。

(C.A.ハニー)

× ×

イタリアの円盤同乗事件

スイス、バーゼルの協力者ルウ・ツィンシュタック女史から七月二十日付でよこされたニューズレターによると、イタリアで発生した驚くべき事件が最近話題となり各誌をにぎわしているという。以下は〝ドメニカ・デル・コルリエール・デラ・セラ〟の七月号の記事を引用したものです。―編者

―編集者の前おき

本社の記者レナート・アルバネーセにむかって、円盤を見たと称しているイタリア人を訪問せよと命じたとき、アルバネーセ氏はフンと笑いとばしてしまった。しかし、たとえ幻覚であるようにみられても、興味ある記事のネタ探しをすることが仕事の一つであることを知っている氏はとにかく旅に出た。我々は氏が依然として笑いながらその円盤事件を茶化して帰って来るものと思っていた。ところが彼は打って変わった様子で、全く深刻な顔をして帰って来たのである。ひどく考え込んでいるようであった。「率直に言って、僕は何と言っていいかわからない」と彼は言った。「いわゆる円盤というものが存在しないとしても、何か信じがたい妙な物がやはりあるんだ」

―ボローニャの機械工ルチアーノ・ガルリーの話

ガルリーは何の変哲もない普通の人間で、四十三才の小男である。彼は童顔のために年令よりは若く見える。近視で、いつも眼鏡をかけている。妻があって子供は三人ある。彼の住んでいるアパートはカスティリオーネ通りの近くにあるが、この住所はローマのアルベルト・ペレゴ(註。イタリアGAP主宰者)から聞いたものだ。ガルリーは温和な技術

家で、小さな工場の長である。暇なときは釣をする。

私は（アルバネーセは）借りた車で到着した。するとガルリーは気楽な態度でハンドルを握って彼が円盤に出会わした地点へ運転して行ってくれた。この目撃事件は一九五七年の七月七日に起こったのである。我々の車は町を離れてサン・ルフィリョをまわり、丘に続く小さな道を進んで行った。そこから我々は或る峠に着いたが、そこはクロアラという名の山の背で、ボローニャから五十七キロの地点であった。二人は車を出て少し低い広場へ降りた。その広場は岩でかこまれていた。ガルリーの言によると、ここに円盤が待機していて、地上約二米の空間に浮かんでいたという。

その円盤の色は輝く銀色であると彼は語った。詳細を聞いて私はアダムスキ氏の体験を思い出したが、ガルリーは円盤とコンタクトした当時アダムスキという名前さえも知らなかったと誓った。彼は絶対に作り話をしているのではないことを知らせるために、後に、アルバネーセにたいして次のような宣誓書を与えている。「私は評判をたてられたり金を儲けたりするためにこの話をするのではありません。私が語ったことは真実の体験に基づくものです」

以下はガルリーの話である。

一九五七年の七月七日、私は昼食後仕事場へ帰るために二時二十分に家を出た。当時私の仕事場はカスティリオーネ通りからはずれた袋小路にあった。私がこの袋小路に近づいたとき、突然黒い車フィアット一一〇〇が私の前に停まった。すると黒い服を着た背の高い男が車から出て来た。顔付は普通だが目は黒くて、友好的な様子を示していた。ダブルの服にタイを着けた完全な服装で、その男は流暢なイタリア語を話した。その車のハンドルの所には別な男が座っていたが、顔付は美しくて明るい色の服を着ており黒服の男のように口ひげを生やしてはいなかった。そして一言ものを言わなかった。私は口ひげを生やしている男は知っていた。かねてから町で数度見かけたことがあり、私をつけて来たこともあったからだ。一度私が友人と一緒にカスティリオーネ通りのアーケイドを歩いていたときも、この男を見たことがあった。いつものように彼は私の目をジッと見つめたので、そのときは話しかけようと思った。すると急に彼はいなくなってしまった。そして再びその人が私の目の前に立って、自分をおぼえているかと聞くのだ。おぼえている、と答えると、

「一緒に行きませんか？」と言う。

「どこへ？」

「信用して下さい。大丈夫ですから」

私は車に乗り込んで二人の男と一緒に行った。二時半頃に車はクロアラ峠に着いた。見ると一機の円盤が待っていた。機体の底から金属の円筒が出て来て、一種の入り口が現われた。それを通って私は中へ入って行った。（アルバネーセ註。この部分は洋服屋のマリオ・ズッカラの体験談と一致している）

始めは恐れていた私も円盤内部に入ったとたんに再び驚異を感じた。二つの光が点いたとき私はまだ内部へ完全に入っていなかった。「心配ばいりません。今、写真を撮ったのです」と口ひげの男が言った。

―「その日、あなたはどんな服を着ていたのですか？」とアルバネーセは尋ねた。「今の姿と同じです。仕事着のままでした」とガルリーは答えた―　ガルリーの物語は続く。

パイロットの室は広くて、周囲に機械器具や、針のついた計器盤などがあった。また数個の丸窓があり、座席は床に固定してあるようであった。床の中央には径約一米の丸い窓があって、そこから地面が下方へ落ちて行くのが見えた。最初地球は飛行機から眺めるような状態に見えたが、後には月のように見え（ただし暗黒の空間に入ってから）、その後金星または火星のように見えた。

司令とおぼしき人と私は話し合うことができた。彼は完全なイタリア語を話した。どうしてそんなに上手に習得したのかと尋ねると、或る非常にうまい方法を応用するのだと答えた。

そのうち突然私は丸窓の外に巨大な母船の影をみとめた。その長さは少なくとも六百米はあった。一方の端は葉巻きの端のように切られていた。このツェッペリンは一種の螢光を放っていて、その頂上にはあたかも強い光線がそこへ照射されているように見えた。先端の切り口の下部に六つの入口が見えて、そこから小さな円盤群が出たり入ったりしているのが見えた。各入口は更に仕切壁によって小さな六つの小室に分けられていた。「これが我々の宇宙船なのです」と連れの人が言った。

母船に近づくにつれて、この各入口は大格納庫であり、少なくとも五十機の円盤を收容できるものであることがわかった。そして四百ないし五百名くらいの男女が各格納庫の内外に立ったり歩いたりしていた。この人々はすべてプラスティックか絹のように見える輝く材質の作業衣を着ていた。我々一行が通りすぎると、皆は微笑した。婦人たちはきわめて美しくて親切であった。すっかり固くなった私は、連れの人にむかって「この宇宙船はどこから来たのですか」と尋ねた。「君たちが金星と言っている遊星から来たのです」と相手は答えた。

次いで私は一種の図書室のような大きなホールを通って別な大きな室へ案内されたが、そこを私は司令の室だろうと考えた。その後しばらくしてから再び格納庫へ帰り、同じ円盤に乗り込んだ。絶えず例の口ひげを生やした男と天使のような顔をした男が付き添っていてくれた。そしてクロアラ峠の元の地点へ着陸した。その時刻は同じ日の五時二十分頃だったから全部で三時間と十分かかったわけだ。

以上のような驚くべき話を聞いたあとで私は（アルバネーゼは）ガルリーにむかって、その体験は恍惚状態または催眠状態のもとに起こったのではないかと尋ねてみた。すると彼は答えた。「絶対にそんなことはありません。この宇宙旅行は私の肉体と共に行なわれたのであって、私の言っていることは真実以外の何ものでもないことを断言します」

（十九頁より）が何と言おうとも何をしようとも気にしないことにしようではありませんか。信念を持って仕事をすれば我々の仕事は前進します。―中略― いつの時代にも真実に直面できない部類の人々がいるものです。私の仕事の遂行に多額の費用がかからねば、私は日本行きの旅客機に乗り、あなたのすばらしいグループの皆さんにお目にかかって、詳細をお話しましょう。しかしその特権が許されるまでは待つ必要があります。さしあたって金のかかる仕事がありますので―。我々が真実を固守する限り、あなたがたのいずれも最後には勝利を得ることを私は確言します。そうです。ハニー氏はすばらしい仕事をやっています。彼がいなかったら私はどうなったかわかりません。我々は前進しましょう。意志のある所には方法があるのです。ブラザーズはあなたの奉仕を非常に喜んでおられます。私は約三週間前にブラザーズに会いました。―後略

七月二十五日

ジョージ・アダムスキ

アダムスキ氏から編者宛の私信

―以下はA氏からの私信として最新のものです―編者・

六月十八日付のあなたの各国協力者宛英文ニューズレターを私は読み終えたところです。あなたが手紙のなかで述べた、〝真実に対抗して問題を混乱させようとしている人々のなかには、自分の自我（エゴ）がズボンよりも輝かしいためにそれをやっている人がいます。彼らは自分自身が取るに足りぬ人物であるがためにひどかどの有名人になりたがっているのです。またなかにはサイレント・グループに買収された人も多くいます。私がサイレント・グループというのは金でもって各国をコントロールしているのみならず、各教会をもコントロールしている金持ちのグループを意味します。それらの者どは教会にたいする多額の金者であり、教会は真実を大衆から遠ざけることによってこの金持ち連の意志を代行しているからです。しかしかかる暗躍にもかかわらず、我々の活動は展開してゆきます。我々が大気圏外に一歩踏み出して行くごとにそれは真実と一致し、ウソを表面化させるからです。コンタクトしたと自称する団体の例のコンタクトマンたちのいずれも口ケットによる新発見で支持されてはいないにかかわらず、一方、真実のコンタクトマンたちはその真実性が立証されています。私自身を例にあげますと、ジョン・グレン、カーペンター、その他ロシアの航宙士たちまでがあの〝光の光〟として知られる物を見たと報告していますし、X-15のパイロットたちも空間に物体を目撃したと報告し、そのなかのウォーカーは写真まで撮っています。加うるに、今日は多数の科学者が私の書物のなかに述べてある事柄を支持しています。ところが例の人たちの混乱らしいコンタクト物語のいずれもこの新発見と符号してはいません。私はただ次のように申しましょう。すなわち、真実はいつか勝利を得ること、そして多数の人がいつか目覚めて自分たちがウソの物語やウソの予言などに時間を浪費していたことに気づくだろう、と。このことは我々が予想する以上に早く実現するでしょう。そして私以外にも多くの正しいコンタクトが行なわれているのであって、そのコンタクトマンたちのなかには数々として仕事をやっている人たちもいれば、私のように公然と明るみに出ている人もあります。私は自分を有名にしようというのではありません。ただ発生した事実を語っているだけのことです。あなたも知っているように私が世界諸国旅行をしたとき、各国で私は政府の要人と会見しました。英国で私は国防関係の最高責任者と会い、食事を共にしましたし、ローマでも政府のトップ・マンと会って食事を共にしました。米国で私は上院議長に話をしていますし、国連ではハマーショルド氏の右腕であった人に、最近はハマーショルド氏の後げい者の側近に状況を説明しているのです。この人々は馬鹿ではありません。私の話がウソであったり、私の体験が真実でないとすれば、この人々が私と関係を持つ者がないことはわかるでしょう。彼らにはそうするべき理由があるのです。フレッド・ディクソンやキーホーの如き人々が価値のある知識を持っていたとすれば、彼らもまた各国官からその知識を求められる者です。私は以上のすべてを私の手柄にするつもりはありません。手柄はブラザーズに帰せられるべきものであるからです。なぜならブラザーズがいなかったら、今日の如く地球人は宇宙に関する知識が得られなかったでしょう。私は今まで或る大きな研究所に行っていて、八日間そこに滞在しているあいだに、職員がイオンの力を発見するのを手伝っていました。それゆえ、真実ということになれば私は自分の言葉に自身があります。ですから、次行（次頁）

（十八頁下段に続く）

―編集後記―

▲ジョージ・アダムスキ氏を支持してきてからかなりの年月が流れました。その間私自身もさまざまの体験を経て学ぶこと大なるものがあり、御協力を惜しまれなかった方々に衷心より御礼を申し上げる次第です。円盤研究界で最も話題となったA氏についてはその後も多くの議論が行なわれていますが、大勢はA氏を白と考える方に傾きつつあることは間違いありません。その科学的傍証は多々ありますが、何といっても例の宇宙空間の"蛍光"が決定的な線を出したといってよいでしょう。前記のA氏の私信中にもありますように航空士が次々とこれを目撃していますけれども、特に注意をひくのはX―15のパイロットであるジョー・ウォーカーがこの光る物体の写真を撮ったことです。これについてニュージーランドの協力者ヘンク・ヒンフェラーからの情報によりますと、今年五月十日にウォーカーが二十四万六千七百フィートの上空で撮ったフィルムに五、六個の例の物体が写っているということで、この不思議な物体は明らかに円型でした。カーペンターは彼の見た物がカプセルから離れた屑だと信じていますが、グレンはその物体が独立した性質の物だと断言しています。機体から離れた何かの付着物がみな円盤型に写るというのもおかしなことで、これは偵察用の小型円盤であったというA氏の説明がやはり合理的のように思われます。また、私のみるところでは、A氏とハニー氏はすでに米政府の高官筋と重要な関係を持っているように考えられます。もちろん政府側としてはそんな関係をヒタ隠しにするでしょう。しかしA氏にたいして依然として抵抗を試みる人もあります。たとえばレオン・デイヴィッドスンなどがそれで、彼は数年前に、アダムスキは米国のCIA(中央情報局)の打った芝居にだまされていて、円盤や宇宙船などはすべて砂漠に仕掛けられた巨大なセットであったという説を発表して、今だにそれを唱えているところから、さすがにデスモンド・レズリーが業を煮やして「迂方もなく馬鹿げた説にたいしては我々は迂方もなく馬鹿げた回答をするのがよい」と前置きして"告白"と題する甚だ痛快な文章を英国の円盤研究誌"軌道"の最近号に載せています。これは実に面白い記事ですが紙面の都合により省略します。とにかくアダムスキ氏が如何なる論争の的となろうが、私に関する限り氏が今世紀最大の人物の一人であるという考えに変わりはありません。人物が偉大であるほど多くの妨害者が現われることも古今の史実が示すところで、A氏の場合も抵抗が存在するのは至極当然です。これについて米国のGAPのリーダーたちが互いに激励し合いながら一丸となって協力をしている様子を私は美しいものとみていますが、彼らの合言葉は「科学上の新発見による裏付を忍耐力をもって待とう」の一語に尽きます。関心のない人に押しつけて信じさせようという運動ではありません。

▲ところで今春米国内の週刊誌などにA氏に関する記事がしばしば載りましたが、その大半はひどくデタラメな記事でした。好意をもって載せたつもりでも、その内容はひどく歪められていて、当初は無視していた私もいささか考えざるを得なくなってきました。そこで、訂正や参考の意味で私のニューズレターを出版社宛に送るのですが、それがまるで駄目なのです。おそらく「なんだ、がり版か」といったところでしょう。これは個人で購読を申し込んでくられる方にもあてはまると思います。一度注文しただけであとはそれきりという例がかなりありますから―。それで私はこの機本誌をどうしてもタイプ印刷にする必要があると考えるようになりました。もちろんがり版だからといって軽蔑される理由はありませんが、しかし私がタイプ印刷を望む別な理由は、がり版は手間

のかかることおびただしく、手元に多くの資料があってもそれを思うように掲載できない点にあります。活版印刷はとても問題外のものであるとしても、タイプ印刷といえども印刷費に安からぬ費用がかかります。毎号印刷所に依頼するということはやはり夢にすぎません。あれこれと考えた末、二つのアイデアが浮かびました。それはつまり、私の手元に和文タイプライターが一台と謄写版写真機があって、私がみずからタイプを打って印刷すれば、ガリ版よりもはるかに手間がはぶけて、しかも読みやすいきれいな印刷物が格安にできるということです。私自身が印刷屋の機能を果たすのですから人件費が不要です。ところが、タイプライティングと印刷の技術には自信がありますものの、問題は機械の購入資金です。私個人ではどうにもなりません。そこでひとつお願い致したいのは、タイプライター及び印刷機の購入資金として一口三千円を四十名の方がお寄せ下されば、購入計画が実現するということです。その場合十二万という金ができますから両方の機械を購入できますが、さしあたって十万だけでもあれば新品の和文タイプライター（日本タイプライター専門製用、9ポ活字一式と四号活字一式付、正価十万三千円）が入手できると思います。そして印刷機は借物で間に合わせればタイプ印刷にすぐにもとりかかれます。これは当初費用がかかるようでも、会報を二カ月月刊で出し続ければ元がとれますから、印刷所へ依頼するよりは結局安くつくことになります。もちろんこの機械は私の私有物とするのではなく、皆様の共有物とし、労力を私が提供して奉仕しようという次第であることはおわかりでしょう。同じ奉仕をするのならば原始的な方法をやめて機械化により能率をあげるほうが望ましく、それに「テレパシー」の改訳版、「宇宙哲学」等の出版の困難な書物類も自家版で安く出せます。また、この計画は会員間の共有組織としますから、御協力下さった方で、個人的に何かの印刷をしてもらいたいと希望される向きには用紙代とインク代の実費だけで印刷して差し上げますから、御寄付も決して無駄にはならないものと存じます。私はこれまで海外向けの英文ニューズレターには英文タイプライターを利用して作製していましたが、この便利さは言葉では表わせません。こうした精密機械の操作に私は強いのです。純粋な気持でより以上の奉仕をするために私が目下和文タイプライターの入手を心から切望しているということを御賢察下さいまして、なにとぞ皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。なおこの計画は当初かりに御協力下さる方が少なくて早急に実現しなくても、浄財を積み立てて長期計画で頑張りますから御安心下さい。

▲本号掲載のハニー氏の〝幽霊現象と霊界通信〟のなかで米国の偉大な霊能者エドガー・ケイシーの哲学は九〇パーセント真実だとあります。これについて詳細を知りたい方は左記へ照介してみて下さい。次の訳書を発行しておられます。「奇蹟の人―エドガー・ケイシーの生涯」一部三二〇円、送料七〇円。東京都中央区日本橋室町四の六、英瑞カンパニー（振替東京一九七一四）

▲各方面から先般の水害及び暑中見舞状をいただきまして厚く御礼を申し上げます。さいわい拙宅には水の被害はありませんでした。

▲酷暑の折から皆様の御自愛をお祈り致します。

◎近頃ロケットに乗る航宙士のことをジャーナリズムが〝宇宙人〟と称しますので、本誌では他の遊星の人々をすべて〝ブラザーズ〟と称しています。

Vol.1, No.10-11
日本GAPニューズレター 1962 7月・8月号
編集発行人 久保田八郎
発行所 島根県益田市猪尻町字高川 日本GAP
昭和三十七年八月十日発行・頒価五〇円